

おどる牛

川重茂子 作 菊池日出夫 絵



作者 川重茂子(かわしげ しげこ)
1938年、中国長春市(旧新京)に生まれる。「丸木橋」同人。本書が処女出版である。
現住所＝広島県呉市焼山政畝3—2—14

画家 菊池日出夫(きくち ひでお)
1949年、長野県南佐久郡に生まれる。
絵本に、「やまばと」(童心社)、福音館書店の月刊誌『こどものとも』に、「さんねんごい」「はるまつり」「のらっこ」「ゆきあそび」がある。
現住所＝埼玉県比企郡小川町角山317

おどる牛

文研じゅべにーる

作 者 川重茂子
画 家 菊池日出夫

発行者 佐藤武雄

発行所 文研出版

東京都文京区向丘2—3—10 ☎113

電話 03—814—2151

大阪市天王寺区大道4—3—25 ☎543

電話 06—779—1531

印刷所 岩岡印刷株式会社

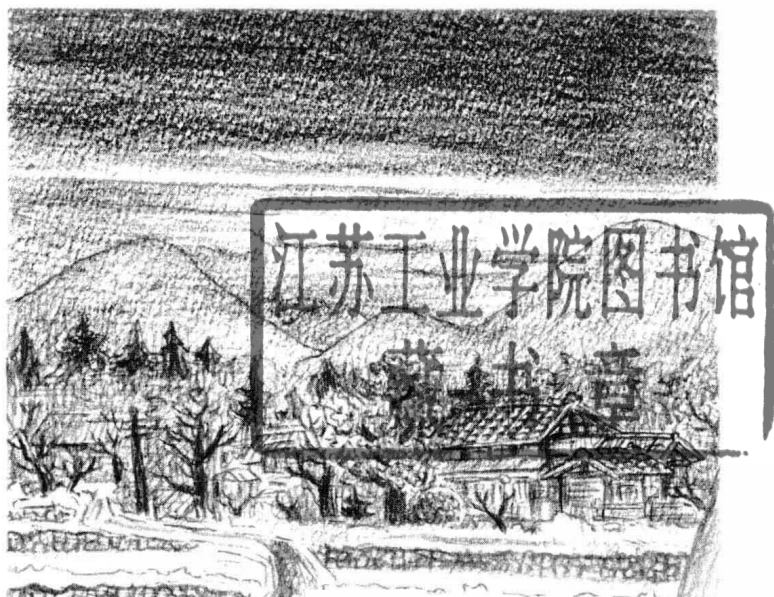
製本所 倉橋製本株式会社

NDC913 208p 23cm 菊判

© 1989.9 S.KAWASHIGE H.KIKUCHI

おどる牛

川重茂子 作 菊池日出夫 絵



もくじ

1 春の案内人

母牛クロ／道草

6

2 小さなベコ

クロのお産／立てないベコ／オットセイが牛になった日

15

3 ハチの先輩

犬のハッピー／かわった子ら／森滝ファーム／
安い卵／ダルマ鳥

42

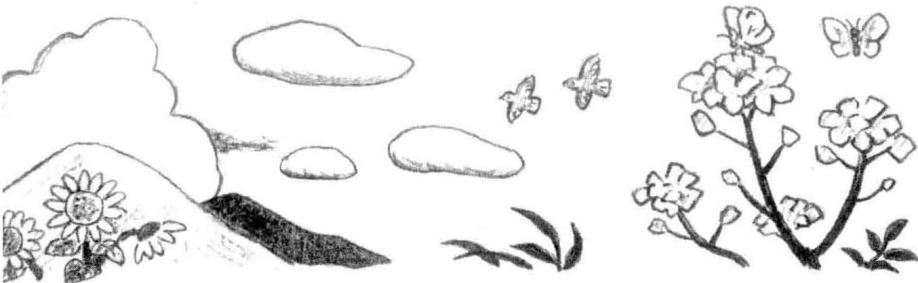
4 「五助田」のソフト

5 母さんのしろかき

農協さん／くだり坂

76

63



6 父さんの宝もの たから

父さんの帰宅／おどるハチ、歌うパツピー

86

7 野良猫の家族 のらねこ

農薬の散布／「チヨビ」という猫／一匹の子猫／家出してやる

106

8 盆の月 ぼん

イネの花／花の手紙

135

9 ハチの後輩 こうはい

実りの秋／ミチの特技

148

10 ハチの病気

固い腹／獣医さん／雪の夜

156

11 ハチ、さようなら

あとがき

193

206



おどる牛



1 春の案内人

(1) 母牛クロ

三月の細谷地区は、ゆるみはじめた雪が、たな田（急なけいしや地をたがや
して階段状につくった田）のあぜからせりだして、白い雪ののきをつくっている。

おれは、台所の窓から、うわ目づかに空を見た。山の上の細長い空が、晴れていることを見とどけると、

「明、いくどお。」

と、四月から三年生になる弟をよんだ。

「いまいく。」

明が、かばんをしょいあげる音を聞きながら、おれは、牛小屋の前へでる、勝手口の戸をあけた。
「いつてきまーす。」

「はーい、忘れものはないかね？」

母さんは、茶わんを洗いながら、よく忘れものをするおれのために、気をまわす。

「寒いのにご苦労じやのう。気をつけていきんさいよ。」

八十になるばあちゃんは、毎朝同じことばをくりかえす。

おれと明はいつも、母屋と納屋のあいだにある、土間を通って出入りする。

これは去年、母さんが牛を飼いはじめたときからで、出入りのたびに牛を見て通るうちに、くせになつた。

ばあちゃんも、昔は牛を飼っていたそうだが、末っ子の父さんが働くようになってから、やめたという。

「おじいさんが生きとつてなら、牛飼しも、やめずにつづけたかもしれないがのう。なんせ牛は大食いで、草だけでもしよいかご一ぱいかるがると食べるんで、世話がかかる。草刈りやら切りワラやら、まんまの世話だけでもたいへんで、年ひろうたら（年がいくと）気弱になつて、やめてしもうた。じゃけど、牛には、ようけ（たくさん）助けてもろうたもんよ。」

いつだったかばあちゃんは、牛の話がでたときに、こういつて目を細めた。

母さんは、一昨年まで、学校の近くにある縫製工場へつとめていた。工場が不景気で、人員整理をしたときに、地元の母さんたちがクビになつた。

母さんが牛飼いはじめたのは、それからだ。

おれは、もうすぐ五年生になる奥山健太。全校生徒が、たった十二人の森滝小学校へ通っている。

「クロや、学校へいつてくるぞ。」

おれが、牛の首だしの、かんぬきの上からのぞいたら、クロのようすが、ちよつとおかしい。いつもなら、すわつておい、(いったん胃袋へ入れたものを、もう一度少しづつ口にだしてかむこと)をかんんでいるか、立つていてもよぶとすぐふりかえるのに、きょうのクロは見むきもしない。

牛小屋のはしをゆつくりとまわりながら、しきりにワラのおいをかいでいる。そして、クロのしりからは、透明な、帯状のものがのぞいていた。

「兄ちゃん、あれなんじゃ?」

明も気づいて、かんぬきのあいだから牛小屋をのぞきこんだ。

おれはすぐ、勝手口へとつてかえした。

「母さん、牛のしりから、へんなものがさがつとるよ。」

「ええ? まさかあ。」

母さんは、テーブルにすわっているばあちゃんをふりかえつた。

「予定日は、四月のはじめじゃろう?」

よつこらしよと、ばあちゃんが立ちあがる。

「ええ、四月三日が予定日だけえ、ちようど一か月はやいわけ。お産かしらん。」

「少々はやいのは心配ないが、一か月じゃあはやすぎるのう。」

母さんにつづいて、少し腰のまがつたばあちゃんが、右手でひざをおさえながらでてきた。

ばあちゃんは、かんぬきにつかまって、クロをみる。

「まちがいないのう。ワラのおいをかいで、産む場所をきめよるし、なんべんもうしろをむいて、腹^{はら}やらしりを気にしよる。こうなったら、ジタバタあがいてもしょうがない。獣医^{じゅうい}さんに電話をして、敷きワラをかえてやろうや、のう、母さん。」

「はいはい、すぐに岡田^{おかだ}さんに、電話をしたらええんですね、電話を。」

母さんは、急にせかせかしたものいいになって、勝手口へかけこんだ。

「なんじゃ、あれ。へいぜいは、母さんのいうことを、ばあちゃんのほうがへい、へいいうて聞きよるのに、けさはころつと反対じゃ。母さんのほうが子分になつとる。大人は、変身がはやいのう。」

木戸の坂をおりながら、おれがいうと、明^{あきら}は口をとがらせた。

「兄ちゃんも、ときにはころつと変身をしてくれえや。ぼくはいつつも、こき使われるばかりで、損^{そん}じゃ。」

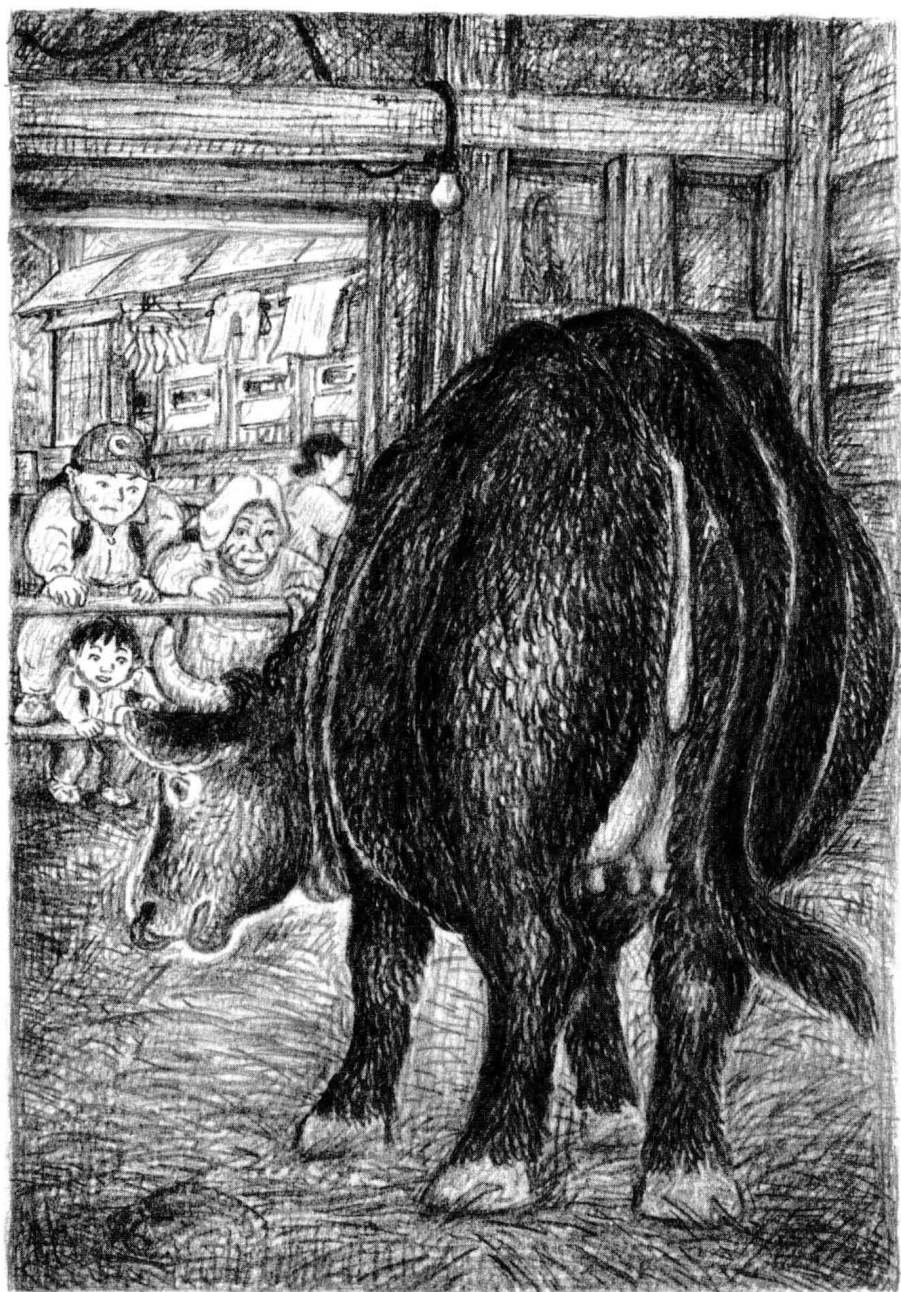
「心配せんでも、きょう、学校から帰ったころには、明^{あきら}の子分が生まれとるよ。モオーとなく、黒い子分がの。」

「ほんまか？　なら、きょうは、はよう帰ろつと。」

「おう、まっすぐに帰ろうど。」

おれは右手をさつとあげて、勢いよく指を鳴らした。

（子牛が、春をつれてくる。）



そんな気がする朝だった。

(2) 道 草

名まえのとおりに、細長い細谷地区ほそだにの、もう一人の小学生は、今度四年生になる森山哲夫もりやまてつお。哲夫てつおの家は、おれのうちより百メートルほどしもある。

戦後は、細谷地区ほそだににも三十軒けんの家があり、子どもがゴロゴロいたというのに、いまは八軒けん。年より夫婦や、一人ぐらしの家が多くて、小学生はたったの三人。

細谷ほそだには、県境けんさかいに近い、牛頭山うしづやまのふもとの谷間を、二キロにわたってくねっている。

その日、おれも明もあきら、朝の約束やくそくをすっかり忘れて、せまい道路いっぱいに、右往左往うおうさおうしながら帰っていた。

道が、川幅かわはば三メートルあるなしの、谷川ぞいになったとき、哲夫てつおがとつぜん、足をとめた。「や、ええもん見いつけた。フキノトウじゃ。」

いうがはやいか、やせつこの哲夫てつおは、体をひらつと宙ちゆうにうかせて、雪の川原へとびおりた。水辺ぞいにあらわれた茶色い草地に、もえぎ色したかたまりが、二つ三つのぞいている。

今度は、先頭を歩いている明あきらが声をあげた。

「ぼく、オランダガラシ見つけた。」

ガタガタツと、かぼんを左右にふらつかせて、明も石ごろごろの川原におりた。

「どこどこお。」

流れがよんだ草地の先たんに、セリにいた茶緑のかたまりが、うかんでいる。

色づいたものがなにもない雪の川原で、小さな緑は、やはり目につく。

「そんなもんとつて、いつたいだれが食べるんじや。」

「知らんよう。じゃけど兄ちゃんはいつだつて、『食べんでも、とるのはおもしろい』いうじやないかあ。」

明はしゃがんで、まだ小さなオランダガラシに手をのぼした。

「わしんちの母さんは、フキノトウの、苦いところがええいうんじや。大人いうて、へんなのう。」

哲夫は三つのかたまりを、上着のポケットにおとしこんだ。

「うちのばあちゃんなんか、もつとへんなど。フキノトウや茎はもちろん、葉っぱまで食べて、やつと安心するいうんじや。苦いのにのう。」

おれも、いつの間にか哲夫の話にのせられてしゃべりながら、川上に目をやった。

谷川におちこんだ、むこう岸の山から、黄色い花をいっぱいつけた、タニイソギ（マンサクはタニイソギという、広島県北で）の木がのびている。それぞれの木が流れの上に枝をひろげて、かたむいてさいている。

（夏になると同じかたちで、桃色のネムの花がさく。ネムの花と、タニイソギでは、色こそちがうが、



こいつらきつときようだいか、いとこなんじゃ。水の精の化身かもしれんぞ。」

おれは一瞬、ぼけつとして、こんなことを考えた。

三月はじめは、野も山もまだ残雪におおわれて墨絵色だ。灰色と白だけの景色のなかで、谷川のまわりだけが黄色い花で、ポツと明るい。

「タニイソギの花はのう、まだ雪があるところにさくんだけえ、大事な春の案内人よ。春の神さんは、タニイソギのあかりをつとて、村へのぼつてきなさるんど。」

おれは急に、ばあちゃんのことばを思いだした。

「兄ちゃん。」

明がかばんをゆすりながら、哲夫のあとから走ってきた。

「きょうはベコが生まれとるけえ、道草せずに帰ろういうたじやないかあ。」

「おつ、そうじゃ。明の自分が生まれとるのに、忘れとった。哲夫や明が、フキノトウだのオランダガラシだの、へんなものを見つけるけんいけんのど。あとは、マラソンで帰るしかない。」

おれは、ゆるいのぼり坂をかけた。

哲夫も、おれを追いかけてくる。

「おーい、兄ちゃんら、まってくれえ。ベコのこと、ぼくが教えてやったのにい。バカヤロウ、兄ちゃんと哲のあほんだらあ。」

半分泣き声の明の声が、山々にこだまして、「おんだらあ、らあ。」と、追いかけてきた。

2 小さなベコ

(1) クロのお産

その日、とうに子牛は生まれていると思いながら帰ったのに、子牛の姿は、まだなかった。母さんが、三本のかんぬきがある、牛小屋の前をはいていた。

クロのしりからさがついている、ところてん色のベロンとした帯が、けさよりも長くなってゆれている。「なんじゃまだかあ。急いでもどるんじやなかったのう。」

「うん。」

帰りのドタバタを思いだしてか、明がニヤツとえくぼをつくった。

「大けな声をだすと、クロの気がたつて、おくれとるお産がますます長びくんだに。」

おれがいきおいこんでしゃべったので、母さんは、人さし指を口にあてて、ギュツとにらんだ。おれは、肩をすくめて舌をだし、「はい。」と長い返事をした。

勝手口の戸をあけると、台所ではばあちゃんが、大きななべでみそ汁をつくっていた。